

システムバイオ社会学

System Bio-Sociology

ゲオルクトレメル | 訳-篠橋直子

Georg Tremmel / trans. Naoko Shinogi

「アーティストにとって、バイオテクノロジーの真の魅力は、具体的なものと象徴的なものとを結合してくれることにある」[1]。バイオテクノロジーがアーティストの関心を引く理由について、ヒース・バンティングのこの発言は核心を突いている。具体的な現実を何らかのかたちで表象するものであるシンボルを、生み出し操作する存在がアーティストであるが、これに対しバイオテク[=バイオテクノロジー]は、興味深い探究のための遊戯場を提供してくれるのだ。こうしたアーティストたちが前衛であるか、それとも社会の先頭に立っているのかは、のちに振り返ってみて初めてわかることだろう。バイオテクノロジーそれ自体、すでに強力な新興分野として、画期的な結果を出しつつある。「バイオテク」という語から喚起される、象徴的コンテクションや社会的反映と結びついたとき、これは単なるテクノロジー以上のものとなり、社会の変容を促すことになる。そして「バイオテクノロジー」を魔法の3文字、「DNA」と置き換えれば、バイオテクノロジーが真の力を発揮する場所へとまさに到達できる。その場所こそが、象徴的なものと現実的なものとが出会う地点にほかならない。

ヒース・バンティング: ネット・アーティスト、『バイオテク・ホビイスト・マガジン』の創刊者。2004年にはブリストル(イギリス)で DIY DNA DAY を結成し、実務家とアーティスト、科学者たちを結びつけている。

自然システムにとって自然なシステム

1735年、スウェーデンの植物学者カール・フォン・リンネは著書『自然の体

系』を発表し、あらゆる生物の分類方法を創始した。このリンネ分類学、すなわち名づけ行為は、自然の領有および征服と見なすことができる。この分類法は、理解し、知り、制御することが可能なシステムとして自然を記述したのだ。

自然選択と適者生存から進化を説明したダーウィンの説は、次の2点において重要である。

-
適者: 生物学的ニッチに最も適しているという意味での適者であって、最も強いという意味ではない。

-
第1にこれは、ほかのすべての動植物と同様ヒトもまた、何百万年にもわたる進化の産物なのであって、神が直接に創造したものではないという事実を確定した。

-
進化: 驚くべきことに、「進化説」はいまなお説として扱われており、科学的事実とは見なされていない。

-
第2に、進化という考え方により、リンネ分類学に存在する数多くの変種も説明できるようになった。進化とは、自然システムにおけるオペレーターなのである。

-
1930年代、オーストリアの理論生物学者ルートヴィヒ・フォン・ベルクランフィが、一般システム理論構築を開始した。諸生物システムの複雑さと、それが機能し、システムに共通の法則と構造の形成へと向かうさまに、彼は魅了されていた。彼はまた、生物システムは本質的にオープン・システムであり、相互に作用し合い、コミュニケーションするものであると理解した。だが彼の最大の洞察は、システムが生物学だけのものではなく、物理学や社会学にも発生するものだとしたことである。社会とは、複雑にか